

樋口一葉 「たけくらべ」

ここで扱うのは、樋口一葉の「たけくらべ」です。1895（明28）年1月から翌年1月まで、断続的に「文学界」に連載されました。今から100年以上前、日清戦争が終わった頃の作品です。この時期になると、二葉亭四迷の「浮雲」などの影響を受け、言文一致体で小説を書こうとする作家も出てきていました。しかし、「たけくらべ」の言葉と文章は、どちらかという古文に近く、近代よりも近世の色合いが濃いのです。しばしば一葉作品の「現代語訳」が小説家や詩人により挑戦されていますが、その理由はここにあります。もちろん、「現代語訳」を手にとって、「たけくらべ」の物語世界に浸ってみるのも、楽しい読書体験となるでしょう。しかし、ここでは、原文に触れてもらいたいと思います。

この章でこれまで私たちは、小説の言葉そのものを読むことの大切さを確認しました。物語世界は、テキストを織り成すひとつひとつの言葉を通して私たちにもたらされます。しかし、物語世界はテキストの世界の一部でしかありません。だからこの項では、一葉が書いた言葉そのものに触れて、「たけくらべ」

というテキストの豊かさを知ってもらいたいのです。

● Lesson 1

次の一節を読み、どこからどこまでが会話文なのか、そしてその会話の話し手が誰なのか、考えてみましょう。

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら学校は育英舎なり、去りし四月の末つかた、桜は散りて青葉のかげに藤の花見といふ頃、春季の大運動会とて水の谷の原にせし事ありしが、つな引、鞠なげ、縄とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平常の沈着に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさうに礼を言つたは可笑しいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだから取沙汰しける、信如元来かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く